

# ふるさとの大地を想い、甘しょは育つ。

小林 仁

### 甘しょのふるさとは何処だろうか？

サツマイモ、という呼称から、一般には薩摩、つまり鹿児島県の特産と思われることが多い。転じて暑い地域の作物というイメージもつきまとう。しかし鹿児島県では今でも「カライモ」と呼ぶ。つまり、薩摩の人々にとっては唐から渡来した作物というわけである。「唐」は現代の沖縄県や中国など遠い異国を指していた。沖縄県でも「ウム」という一般的な呼び方のほか、中国名の「蕃薯」に由来する「ハンス」と呼んできた。甘しょの呼称を辿る旅は、中国から先は二つに分かれ、一方はコロンブスに因む西インド諸島へ、他方は大航海時代の集荷地であったメキシコまで達する。これに分類学や遺伝学上の知見も加わり、その起源地については中央アメリカ説が長い間有力視されてきた。

ところが、1900年代半ばにペルー海岸の遺跡から数千年前の甘しょが出土する。さらに「新大陸の発見」より数世紀も前に南米西海岸から南太平洋の島々に広まっていたことも明らかとなり、ペルー起源説が浮上する。一方で、1960年頃には日本の研究者がメキシコで祖先種を発見したため、メキシコ起源説も再び注目される。これに米国の研究者によるカリブ海沿岸地帯説も加わり、近年、甘しょのふるさと探しの論議が世界的に熱を帯びてきた。

私自身、1976年の南米コロンビアでの情報収集に始まり、ユカタン半島を含むカリブ海沿岸、アマゾン川流域、そしてアンデス高地・山麓…と甘しょのルーツを探る旅を重ねた。そして未だ仮説の域を脱しないが、6倍体の祖先種は熱帯アメリカで倍数性進化によって多元的に成立したと考えている。また、人が野生の祖先種をはじめて栽培した「甘しょのふるさと」は、アンデス山脈西斜

面沿いの標高千メートル前後の高地であろうと推定している。この地帯は古くから根菜文明が発達しており、現在でも逸出したと思われる甘しょが散見される。

ここで特筆したいのは「熱帯アメリカ」という言葉から来るイメージと、実際の気候とのギャップである。冒頭に書いたように、甘しょは暑い地域の作物と思われがちであり、かくいう私も、そのルーツは東南アジアの暑い地域に類似した場所だろうと漠然と考えていた時期がある。しかし、初めてコロンビア・カリ市の空港に降り立った瞬間、自分の勘違いを思い知らされた。7月下旬という時期にもかかわらず、涼しく爽やかな風を頬に受けたのである。

赤道直下のこの地域は、年間を通じ平均気温が25℃程度だが、昼夜の温度差が大きく、乾燥した空気と溢れる陽光が特徴である。

甘しょは他殖性、同質6倍体、栄養繁殖性といった遺伝形質を持っている。このため栽培化や育種による遺伝的な変化は僅少で、生来獲得している野生形質が淘汰されずに内在している。ふるさとを離れて数千年、南太平洋の島々、アフリカ大陸、アジア各国…と世界各地に広まった甘しょ。強健で過酷な条件にもよく堪える作物として知られているが、実は寒さや高湿にはそれほど強くはなく、土壌中の空気や水分もその品質に深くかかわるなど、「ふるさとの風土」が特性に色濃く反映しているのだ。気温・日較差・日長・光の強度・湿度・土壌水分などを、さらに詳細に調査・分析し、その特異性や作用を栽培適地の拡大や栽培法の改善に反映することが重要であろう。

ふるさとの大地を想い、甘しょは育つのである。